

# 女騎士 エンチャール

獣淫の乙女

瀧澤春

表紙イラスト：しばたらい



試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『女騎士シャル 獣淫の乙女』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



女騎士  
シヤール

獣淫の乙女

瀧澤春

表紙 / しばたらい

## 登場人物紹介

Characters

---

### シャル・ディ・ハート

皇帝の近衛騎士だったが、皇帝暗殺を狙う魔術師に感情が昂ると狼の姿になる獣化の呪いをかけられる。以来、魔術師を探して大陸中を巡っている。

### ディーナ

シャルに獣化の呪いをかけた魔術師。

——陛下！　ここは私が引き受けます。陛下はどうか、お逃げ下さい。

燃えあがる炎。そして濛々と辺りを覆い尽くす黒煙。

皇帝直属の近衛騎士、シャルル・ディ・ハートは声を張りあげ、その銀細工のような澄みきった髪を振り乱していた。

手に握られた剣の刀身にはベツトリと鮮血が絡みつき、透きとおるような柔肌にも点々と赤黒い血痕があつた。だがそれは全て敵兵の返り血だ。彼女自身は一片の傷も負つてはいなかつた。

吊り上がった双眸そうぼうをさらにキリリと鋭くさせ、突っ込んでくる敵兵に刃の一撃を与える。諸外国に鳴り響く、『銀の剣』という異名に恥じない雄々しさだ。

見事に真つ二つになつた相手は隣国の兵。今まで誼よしみを通じて良好な関係にあつたものの、突然攻めてきたのだ。風聞によると、相手方は何やら得体の知れない術を使う者がいるという。

（だがそんなものは関係ないッ）

少女のしなやかな全身は軽装鎧にくるまる。何の装飾もない、武骨な鎧が守るのは今にもこぼれてしまいそうなほどの美線を描く胸部と、陰部。すつきりとしたお腹や伸びやかな手足の装甲は削られ、しなやかな四肢を覗かせる。肌は煌めく湖面のように滑らかな輝きを帯びる。

動きやすさを極限まで突き詰めた特注の鎧だ。

そして筋肉質な手脚を鞭のようにビュンビュンと撓しならせながら、振り下ろす太刀筋には一点の迷いもなく、何者をも切り裂く激しさに溢あふれていた。

——そこまでだ。『銀の剣』シャル・ディ・ハート。

目の前に忽然こっぜんと姿を現したのは、身体を黒いマントに身を包んだ女だった。紅い唇に、金絹のような髪を靡かせ、妖の艶が全身から立ち上っていた。

——我が名はディーナ。そなたらの王の命を貰い受ける。

——貴様が、魔女……ええい、我が君の命は渡さぬッ。

そこへ女の従者らしき男達が二人。前傾姿勢でのっそりと現れた。かと思えば、その男達は獣のような雄叫びを上げるが早いか、獰猛なケダモノになってしまった。身の丈は一回り以上も膨れ上がり、服を引き裂き、溢れ出るのは人の腕ではなく、針のように尖った獣毛。

ものの燃えあがる焦げ臭さに、獣臭さが溢れだす。

——獣……。

——これぞ、私の秘儀、獣化の術……ヤレ！

魔女、ディーナの合図でケダモノになった二人の男達が一斉に飛びかかる。

——獣化、だと——な、くそッ！



シャルルは目への痛みを覚えながら、剣を振るう。しかしそんなものが当たるはずもない。——そなたにも獣の気持ちも味わわせてやろうと思つてな。ふふ、よく似合っているぞ。ふふ、美しい毛並みじゃ……！

魔女は高笑いを響かせながら遠ざかり、闇へと消えていった。

やがて王の近臣から裏切りものが現れ、王は殺された。シャルルは城を脱出、近くの森でひどく重い身体を引きずった。

だが敵国の追っ手は執拗にシャルルを追いかけてきたのだ。

——これで貴様も終わりだな、『銀の剣』よ。

敵の数は五人。剣の構えから、軍の中でもかなりの精鋭部隊であることを感じさせた。

あの剣で陛下を、民を、殺したのだ！

そう思うと、全身の筋肉がピクピクと震えた。そして血流が激しく身体の中を駆け回り、筋肉が激しく波うつ。奥底から何か熱い衝動が噴き上がるのを感じた。

ウオオオオオオオ！

女騎士は魂の底から込み上げる巨大な力の突き上げに叫ばずにはいられなかった。そして自分とは違う何か雄々しい感情が魂も、肉体も支配してしまいそうなエネルギーの爆発に全身が鞭打たれた動物のように飛び跳ねた。

取り巻く兵士達の顔が明らかに変わる。そこにあつたのは一対五という圧倒的優位の余



裕ではなく、目の前で信じられない力の奔流ほんりゅうを目の当たりにした恐怖——。

——いくぞ！

シャルルは身体の内から、全身を引き裂いて溢れんばかりのエネルギーに突き動かされるように後ろ足を踏みきり、男の一人を薙ぎ払った。男はまるで体重などないようにも容易たやすく吹き飛ばされ、大木に背中を打ちつけて気を失う。

女騎士は自分の力の暴走を受け止められず、剣を振るい、男達をあつという間に打ち倒してしまった。すると全身を這はいずり回っていた力の螺旋はかき消え、シャルルは脱力と共に、数年分の疲労が一気に押し寄せる思いに身を震えさせる。

やがて狂おしいほどの虚脱感に襲われながら、寒さに逆立つ全身を押さえる。するとそこには今まで感じたことのない感触があった。ほどよい弾力と、むず痒さ。

身体の中で苦悶の声を上げるかのような熱さに耐えきれず、湖で顔を洗おうと水面を覗いた、その時！

そこには銀色の美しい毛並みに月光を浴びた一頭の狼が——。

「はあっ……！」

シャルルは汗をびっちょりと掻き、布団から飛びだした。

「くはあっ……ああ、クソッ……またあの夢か……」

ググッと胸当てが乳房にめり込ませるように押しつけられ、裏地と乳首とが擦れあつて、背筋の痺れるような疼きが走るのを感じてしまう。

「な、何を馬鹿な……お前なんか……ま、負けない……っ」

必死に集中力をかき集めようとしますが、声の上擦りだけは押さえきれない。それに胸への執拗な刺激に乳首は反射的に勃起してしまい、胸当てと擦れる度に後頭部を痛打されるような刺激に意識が眩む。

「乳首は勃起しているのではないか？ ん？」

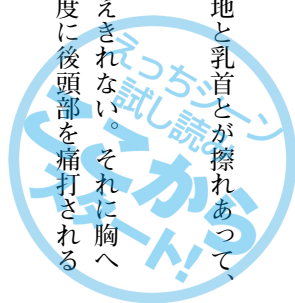
ディーナは鞭の柄で胸当てをグリグリと押しつけながら、陰部へと手を伸ばす。陰部を守る防壁は変型胸当て同様、秘唇をギリギリ覆う程度しかなく、ただの薄生地だった。

「ンああああッ……さわる、なッ……ンハッ……触れるんじゃない……っくう……うん……ッ！」

指先が薄布ごしに触れられた瞬間、背筋から脳天に紅い電流が迸り、女騎士は思わず身体を仰け反らせた。

「やっぱり鞭で打たれて勃起しているのか？ フフ、どうだ、観客の皆さんにお見せしようじゃないか？」

すでに乳房は乳首以外が丸出しになっている状態だ。羞恥心が陽炎のように神経が熱く疼く。



「や、やめ——」

鞭が放たれると、乳首部分を隠していた胸当てが弾かれる。プルン！ と乳果実全体が勢いよくバウンドし、少し色素の濃い勃起乳首が露わになった。

「おおッ！ あれが『銀の剣』の乳首か」

「騎士でありながらあれだけムチムチの身体とは、ほほほっ……」

ジュンツと身体の奥、まるで矜持きょうじが蕩け始めとろたかのように愛液が布地ぶぢごしに広がる。襲肉がビクビクと震え、熱を帯び始めた。

「いやらしいな、グヂュグヂュと陰部からエッチな音がでているぞ」

乳房と陰部とを同時に迫られ、快感が込み上げてくる。さらにさっき鞭打たれ、柔肌に絡みついた痕跡が導火線にでもなるようにジリジリと熱く灼けた。

「な、にを——はうンッ!？」

魔女の指が薄布を横へずらし、熱を持った秘唇の中に侵入してくる。穢らわしい指の挿入に下肢から上肢へ電流のような震えが走った。

「ああ、くう……はうッ！」

奥から滾々と溢れる熱汁が指に絡められ、ぷつくりと膨れた肉芽に擦りつけられる。敏感な女性器に満遍なく愛蜜を塗りたいくらい、太腿が引き攣つりながら震えた。もし首輪の魔力がなければ腰砕けになってしまう。

「ふふ、色っぽい身体だな……ふふふ」

ディーナは少女の細首に顔を述べ、ぺろりと首筋を舐めた。目に見えて身体がビクツと跳ねる。

「や、やめろ……つくッ」

さらに虫のように気持ち悪く這い回る指先が、ツンと勃起したクリトリスをグウツと勢いよく摘んだ——瞬間。

ニユルン！

「ううううううう——ツ！！？」

肉芽の包皮が剥けた瞬間、全身の血液が沸騰せんばかりの電撃が迸った。

「ふふ、イったのか。ふふ、勇敢な騎士といえども所詮しよせんは女か」

「はあ……ああ、……馬鹿な……いく、なんてことつ  
あるわけない。」

しかし瞼の裏に星が幾つも散らばり、全身がカッカッと火照り、頭から水を被ったような汗が夥しく溢れて滴る。ヴァギナに突っ込まれたままの指におもねるように肉襞が絡みつき、泡立った本気汁をたっぷりと垂れ流してしまう。

（あつ……うう……私、こんな……魔女なんかにい、イかせられた……！）

悔しさに全身から血が噴き出しそうだ。ビクビクツと全身の筋肉が間断なく微痙攣を繰

り返す。毛穴は広がり、鍛え抜かれていながら女性としての丸みを損なうことのない女体は香油でも塗りたくったように汗でヌルヌルだ。

「まだ驚くのは早いわよ……フフ、これから本番だから」

「んっ、はあっ……」

指がニュルンと陰裂から引き抜かれると、まるで固形の水飴のような愛蜜がドポポッとこぼれ落ちた。

「なにを……ハウウツ!!」

それはいつもの前兆だった。身体の奥深くから、押さえきれないほどの熱情が込み上げる。神経が敏感になり、口元が弛んで、目元が今にも蕩けてしまいそうなほどに火照り出す。瞳は熱く潤み、眉根を寄せてしまう。

（ああ、こんな人前で……くそ、この首輪のせいカッ！）

首輪の魔力と、獣化の呪いとが共鳴しあっているのが知れる。この波動が起きればどれだけ冷静になろうとしても無駄だった。一度弓から離れた矢を止められないのと同じように、身体の変容を——獣化を抑えることはできない。

全身の筋肉が拍動し、ピンと頭に三角耳が飛び上がり、牙がニョキニョキと伸び、指の爪も鋭くなる。乳房や陰部を除く部分で銀色の獣毛が生えて煌めく。

（くそくそクソオオオオオ……！）

下卑た笑みを浮かべながら荒々しい腰遣いを繰りだしてくる爬虫類男。

「ううん！ んああ……くうう……くつふうううう……ッ!!」

（負けるものか、私はこんなことで……くうう、決して、屈しはしないッ!）

ズンズンッと処女喪失の身にとっては切り刻まれるような激痛が何度も最奥で弾けた。行き止まりを亀頭で突かれるだけで、腰椎から脊椎、脳髄へと紫電が走る。

「いやらしいですね、いやらしいですよ」

爬虫類男は長い舌を伸ばし、シャルルの口元をペロペロと舐めてくる。

「んっ……んんっ……!」

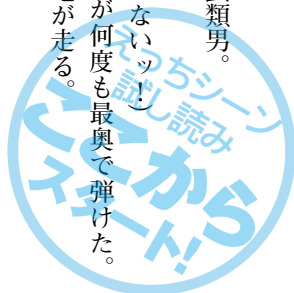
まるで唇を奪われるような屈辱感に目の前が真っ赤になってくる。それでもヌメヌメと涎を纏う舌の動きを封じる事ができず、段々と唾液の感覚にほだされて唇が弛んできてしまう。意識を集中しようとしても、勃起で子宮口を激しく貫かれるだけで、悦虐の波紋が幾重にも渡って全身を通り抜け、全身の痙攣が治まらなくなってしまふのだ。

乳房を弄る巨大熊の淫靡な指遣いも相俟って、全身が官能の恍惚こうごうに痺れてきた。

「おおう、騎士様よっ。そんなに身体擦りつけないでくれよ、おおう……：勃起してきちまうぜえッ!」

「ひうう！ ああ、お、押しつけるなあ……!」

剥き出しの尻肉に押しつけられる鋼のように硬い感触。ドクドクッと拍動するそれは、



紛れもなく熊の生殖器。その感触を避けようとすると、今度は爬虫類男にしがみつこうような格好になってしまう。

「へへへ、私に抱きついてくれるんですか」

「ち、ちが——」

ズブツ、グジュツ、ジユブツ、ズブツ、ヌチュ、ヂュチュ、ヌヂユウツ!!

激しい抽送に、少女は顎を噛みしめる力も失う。そして遂に爬虫類男の忌まわしいペロを受け止めてしまう。

「ンンムグウウウウウツ!!」

舌を絡め取られ、

「んぢゅ、ちゆるる……んぢゅ……んつつうつつう……ちゅぱつ、ちゆるる……!!」

半固形状のゼリーののような唾液を干され、飲まされ、女騎士は酒にでも酔ったように淫臭に意識を攪拌かくはんされてしまう。喉の膜壁にこびりつく感触が気持ち悪く、鼻を嫌悪感が突いてくる。

「んぐつ……んううう……ンンン……ッ」

その間に何度も激しいピストン運動を受け止めている膣肉も激しく痙攣し始め、夥しい愛蜜を何度も散らせた。粘膜は陰茎を包み込むように収縮し、そして引きずられて攣りそうになる。

（ダメだ、こ、このままじゃ……ああ、こんな奴らに犯されて……私は……ッ！）  
 忍び寄る絶頂の感覚に心がおののく。しかしそれを止める術はない。

「ヒヒヒ、私はもうそろそろ……うう、出しますよッ」

「らめ……んちゅ……ンンンッ……だふなんへえ……ゆるひやないからなあ……ンヂユウ  
 ツツ……チュヅ……ぜっはい……ぜっはい、ゆるはないからなあああ……!!」

「へへへ、別に許さなくてもいいですよ！」

爬虫類男は一際猛烈な抽送を、子宮口に見舞う。同時に、間歇泉のような鋭さで白濁汁が放出される！

ドビュルッ、ビュルルッ、ズビュッ、ジュブウウッ、ドビュビュルルルルルル!!

「イフ、イフウウウ、イツツフウウウウウウウウウ——ッ!!」

少女は目の前が真っ赤になるほどの激しい絶頂を受け、ぶちまけられた灼熱に花裂を激しく蠢動させながら、その身を突っ張らせた。

ドビュッ、ヂュブッ、ドビュッ……と激しく放出された精液は熱く、氷柱を突き込まれかき混ぜられるような身体の芯が震えるような感覚とは対照的だった。

「あ、ああ……ああ……っ」

（私……こんな奴にお、犯されて……イ、イかされてしまった……ああ……）

屈辱的な思いを感じるが、身体は波に何度も揉まれたかのような虚脱感を味わっていた。



ヂュブツと、まだ硬い勃起が引き抜かれれば、ポツカリと開いた褻肉を通つて白濁が溢れ出てくる。

（私の……初めてが……こんな奴に……）

精液に混じる処女喪失の代償である血痕が不気味に照つた。

（し、しまった……私……クソッ……こんな奴らの前で気をやるなんて……っ）

悔しさのせいで、涙が目に滲む<sup>にじ</sup>。周りの金満家達の変質的な微笑が歪んで見えた。

褻肉に吸着した汚辱が逆流すると、褻が擦れて、小さな甘美が背筋を流れた。獣耳がピクリピクリと脈打つように揺れてしまう。

「どうです、素敵な体験だったでしょ？」

「ああ……くうう……さ、最悪だあッ……うつくうう」

「おい、いい加減に代われッ」

痺れを切らした熊男がグワアツと吠えた。

蜥蜴男は媚びるような笑みを見せながら、その場を譲る。代わつて獣娘の前に現れたのは巨大な熊。

そしてその股間部分には息を飲むほどの巨大な性器がそそり勃っていた。それは蜥蜴男よりも二回りも大きい直径の太幹に、亀頭部分は赤児の頭ぐらいはありそうだった。臭いも少しだけ鼻孔に入れただけで酩酊感と吐き気が一緒くたになって胃の腑で暴れ出しそう

なほどに陰惨を極める。

「さあ、たっぷりとてめえの孔を使わせてもらおうぜッ！」

巨大熊は、シャルルのムッチリと脂の乗った大腿部を抱えると、無理矢理に女上位の騎乗位体勢に持ち込んだ。

「アアアアアッ!!」

ミチッ、ギチッ、ギチチチチチ!

粘膜が擦れ、秘孔が裂ける音と一緒に、女騎士の陰部に巨大な野獣の陰肉が食い込む。

「だ、めえ……やめ……こんな裂け……本当に、だめッ……こんなの、本当にダ、ダメに……な、なっひゃ……アアアアアッ……!!」

猛烈なホルモン臭を吹き上げながら、女肉を貪り突き進む。

少女の獣耳はピンッとおっ勃ち、フサフサの尻尾まで硬直する始末。口は半開きに、異常発達した犬歯が見え隠れしながら、赤い舌がのたうつように蠢いた。

「安心しろ、すぐに慣れるサッ! 慣れたら一生俺のモノを忘れられなくなるんだぜえ!」

熊が身体を、少女に擦りつけてくる。体毛同士が擦れあい、痛痒感が体に押し寄せる。

しかしそれさえも今の少女にとっては被虐快感を引き立てる格好のスパイスになっ  
てしま  
う。

「やめ……押さえ、つけるな……ああ、まだ……は、入るのか……ッ……ああ、く、くる

……一番奥に、き、きひやううう……ッ!!」

ズズンッ！ 全身に稲光が突き刺さったかと思うほどの激しい衝撃。子宮口が引き攣り、一瞬呼吸を忘れるほどの窮屈感に白眼を剥く。

「オオオオオッ、こいつは最高だぜッ！ 今までやってきた中でもコイツは、極上の部類に入るッ!!」

最奥へ突き立ってもまだ三分の一ほど露出している勃起。そのまま熊は全身を荒々しく揺さぶり、激しいピストンセックスを強いてくる。

ジュブッ、ズブッ、グジュッ、ジュブッ、ズボボボ!!

「ああ、やめ……ダメッ……こんな……ああ、くううああ……ああ、らめ……そんな突かないで！ こ、壊れ……壊れひやううう……!!」

息もつかせぬハードな攻めの前に、少女は快感という毒牙を神経という神経に突き立てられていく。全身がひっきりなしに痙攣し、本気汁がジョボジョボと流れて、熊の体毛へ淫らに絡みつく。

「壊れるものか！」

「ら、らめええ……そんな突いたら……ヒイツ、ヒイイイイ……!!?」

あまりの巨大な快感に怯みそうになった腰を抱えられ、グイイツ！ と抱き寄せられる。子宮口へのスパーリングはより深い所にまで浸透し、子宮を抉られると思うほどだ。何度

も胎内で身の毛もよだつほどの快美が炸裂する。

「どうやら楽しまれていているようですね……」

蜥蜴男が少女の背中に身体を擦り寄せてくる。低体温の身体は汗を掻き、撫でつけられた獣毛から容赦なく体温を奪い去っていく。

「ああヤメッロツ……尻尾……つ、つかむなあ……かつはああああ……！」

獣に変化した状態で尻尾は新たな性感帯だった。そこを掴まれた時の刺激はクリトリスを爪弾かれるような強烈な快美を伴う。

「オオツ、急におま○この締めつけがよくなつたぞ。いいぞ、もっと尻尾を弄れえッ！」  
 すでに大洪水の陰部はいやらしく粘膜を肉裂から溢れさせ、恍惚感に酔っ払っているのが一目瞭然だった。

「これはいいですねえ、……へッへへへ」

蜥蜴男は決して乱暴ではない所作で尻尾を扱ってくる。さらにあの長い舌をのばして、耳の孔を丹念に舐めてくるのだ。

「ああ、だめ、そんな、こと……ううつくうう……するな……ああ、ダメ、感じる……感  
 じちゃう……あああッ……み、耳も尻尾もふれるな……サウルナアアアアアア!!」

咆哮をした瞬間、脳天から爪先に雷撃が走り、そうかと思えば全身の力が水に溶けて消えるような虚脱感に襲われる。

「ゲッへへへへ、どうやらイっちゃまったようだな……今の締めつけ……危うく搾り出される所だったゼエッ」

「ああ……はあ……お、お願い……うう……少し休ませて……アアア……」

敵へ懇願する——屈辱感は伴うが、今の状態でさらに犯されれば気がおかしくなってしまうそうだった。しかし。

「ダメですよ、もーつとあなたを気持ちよくしてあげますからッ……」

耳元で囁くのは蜥蜴男。そしてさっき放出し、そして今もまた放出の準備段階として申し分ないほどにパンパンに勃起した陰部を臀部の割れ目へ擦りつけてきた。

「ひいああ……!」

絶頂の長い余韻に全身が蕩けてしまいそんな錯覚を覚えながら、尻孔に押しつけられた肉刀の感触に全身が鳥肌立つ。

「私はこっちの方で、味わわせていただきますよ」

アナルに押しつけられた龟头に力がこもる。セピア色にくすんだ菊孔は柔軟さを示しながらゆっくりこじ開けられていく。

「そ、そこ……そんな入るわけ……な、ない……」

ズブズブッ!! 絶頂の虚脱感から、括約筋が弛緩していたのか。勃起はあつという間に秘すべき排泄孔に押し入った。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**